

タレント

関根 勤さん

テレビでお馴染みの関根勤さんに、デビューから日々のお仕事について考えていること趣味や家族のことなど、お話を伺いました。笑いの絶えないインタビューの中で、関根さんから弁護士会の広報について貴重なアドバイスもいただきました。

(聞き手・構成：高橋 辰三)



—— 芸能界に入られたきっかけは。

中学生ぐらいから友達の前で物まねをやってました。お笑い活動が好きで、中学、高校、大学と友達5人ぐらいで目黒五人衆というアマチュアグループをつくって活動していたのですが、大学3年にもなりますと、みんな就職だとかいろいろなことで解散になりました。そのときに、せんだみつおさんが司会をしていた『ぎんぎざNOW!』という生放送番組の『素人コメディアン道場』というコーナーに応募して、僕が5週勝ち抜いて初代のチャンピオンになったんですけど、そのときの審査員に浅井企画の浅井社長がいて、それでスカウトされたという形です。最初は自信がないのでお断りしたんですけど。

—— 仕事にしたいという思いもあったのでしょうか。

いや、憧れはありましたけれども、ものすごくお笑い界をリスペクトしていたので、自分が戦える世界ではないと思っていました。

—— 当時あこがれの芸人さんは。

初代の林家三平さん、てんぶくトリオさん、コント55号、クレージーキャッツさん。これが僕のお笑い四天王です。すごく憧れていて大好きだったんですけども、肩を並べて職業にしようとは思ってなかったですね。

—— そのときに披露されていたネタは。

ジャイアント馬場さん対フリッツ・フォン・エリック。タイガーマスク対アントニオ猪木とか、あとは千葉真一さんとか桜田淳子さん、水森亜土さん、あと『刑事コロンボ』ですかね。

—— 職業にされるつもりはなかったということですね。

親父が消防官だったものですから、消防士になるつもりでした。僕はマージャンも酒もだめなので、サラリーマンはきついなと。宿直もあるし、お酒が飲めない方が逆に我慢をしなくていいし、試験で出世が決まるからフェアだなと思って。消防官の父親に恩返しをしたいという思いもあったし、考えてみたら本当に世の中に必要な職業なんですよ。

—— 大学の卒業を待ってからデビューされたのですか。

デビューは、大学3年で勝ち抜いた次の週からです。アシスタントですよ、せんださんの。先週までただの大学生がいきなりアシスタントですよ。

—— どういうことをされたのでしょうか。

司会をしているせんださんの横にいて、よく分からないですけど、それをやっているうちに次はメインの司会者をやらされて。

——最初に司会を担当された番組は。

『ぎんざNOW!』の木曜日、『男の木曜日』というのを担当しまして、しばらくしたら全曜日をやりました。それで視聴率が悪くて終わりました（笑）。実は、僕はデビューをしてからレギュラーが途絶えたことがないんですよ。僕の場合は公開修業をさせられたんです。普通はアンダーグラウンドで修業をして、力を付けてきてから1軍に上がるんですけども、僕の場合は最初から1軍にずっとバッテリーで出されて三振の山を築くという。学生のちょっと面白いやつがまったく通じない様をテレビでずっと見られたという、非常に珍しいタイプでした。

最初の先輩がせんださんで、その後は萩本欽一さんです。29歳のときに萩本さんの番組にレギュラーで入れていただいて、ノウハウを1から教えていただきました。

——萩本さんの指導というのはどういう感じだったのでしょうか。

僕と小堺（一機）君には指導は一切しないんですよ。直接僕が聞いたのは、舞台は団体芸だと。その人に集中させるためにこっちはずっと引くとか、あとは間とかですね。

——関根さんはいろいろな芸人さんが出演されている番組の中で、一番芸人さんのネタにウケていますね。

僕は、単なるお笑いのファンなんですよ。だからあれはもう視聴者みたいになっちゃうんです。もう大好きなんですよ、お笑いが。

——ずっとテレビっ子という感じだったのでしょうか。

そうですね。世代がそうなんですよ。本当に魔法のような楽しい箱だったんですよ。テレビがずっと好きで、だから逆にテレビに出ることが怖かったのかもしれない。テレビって本当に何か夢の中の本当に遠い存在だったんですよ。今の若い人たちは生まれてすぐありますから、すごく身近なんですよ。今はずっと入れる感じに思っちゃうんでしょうね。

——お嬢様の関根麻里さんも芸能人になられたわけですけど、そういった意味であまり抵抗がなくという感じだったのでしょうか。

麻里は全然抵抗がないですよ。だって父親がやっていますから。高校生のときに『世界ふしぎ発見!』

のレポートをやりたいと言い始めまして。『世界ふしぎ発見!』のリポーターになるにはアマチュアではだめで、事務所に入って芸能活動している者の中から選ばれるというのを彼女は調べたんですよ。『世界ふしぎ発見!』のリポーターにはなっていないんですけど。

——麻里さんに仕事のことで何かアドバイスとかされることはありますか。

いや、もうほとんどないですね。

——小堺さんとは、かなり仲良くお仕事をされているようですね。

そうですね。小堺君は『ぎんざNOW!』の2年後輩なんですよ。『ぎんざNOW!』のときから知り合いで、一緒に番組をやっていたんです。それで彼が25歳のときに同じ事務所である浅井企画に入ってきました。それで、萩本さんが2人で修業しろというので、2人でコントをやっていたりしたんですよ。それで『欽どこ』（『欽ちゃんのどこまでやるの!』）に出て、そこからお互いにブレイクしました。当時僕はラビット関根ですね。桂文枝（六代桂文枝 当時の芸名は桂三枝）さんが付けてくれたんですよ。僕も最初は何か面白い名前だなと思っていました。

——関根勤という芸名に変更されたのはどういう経緯でしょうか。

『欽どこ』に出るに当たって、萩本さんは名前を変えろと言うんですよ。僕も29歳だったので、確かにちょっとユニークだけど、それは20代のときはいいけど、40歳、50歳になったときに、狭まるなどと思ったんですよ。ラビットでは時代劇に出られないでしょう。

——『笑っていいとも!』への出演はかなり長かったですね。

長かったですね。29年かな。僕が入ったのは3年目かな。

——『笑っていいとも!』はどういった番組だったと思いますか。

あの当時でいうと、売れている人間しか出られないというような。高校野球で言うと、何か甲子園のようなそういう場ですよ。キックボクサーで言うとK-1みたいな。売れっ子の登竜門みたいな。

—— スポーツがとてもお好きなのですね。

スポーツ全般が好きですね。

意外と思われるでしょうけれども、サッカーは弱いんです。僕が弱いのはサッカーと水球。

—— 東京オリンピックが楽しみなのではないでしょうか。

楽しみです。陸上大好きですから。走るのとか、走り高跳びも好きなんです。棒高跳びも好きですね。オリンピックは大好きですね。

—— スポーツ選手の物まねも結構されていますが、スポーツを見るときには何か芸に活かせないかという視点から見ているのでしょうか。

いや、そんなことはなく、たまたまできちゃうんです。長嶋茂雄さんの場合はエピソードがありまして、僕が23歳ぐらいのときに、スポーツ番組で長嶋さんの特集をするということになりまして、馬場さんとか猪木さんの物まねをやっていたので、長嶋茂雄の物まねはできるのかという話が来まして。本当にちょっとしかできなかったんで自信がなかったんですが、仕事が欲しいから、本当は完成してないのに「できます」とマネジャーに言って、収録まで1週間ぐらいあったので、なるべく長嶋さんを見て勉強して、50%ぐらいの感じで仕上げていって、ユニホームを着てやったわけですよ。

でも似てないなと思って、これは失礼なことをしたなと思い、悔しくてそこから1年、長嶋さんを見まわって、完成させたんですよ。

—— 最近、新しく物まねに挑戦している方っていますでしょうか。

最近はBSのNHKの『偉人たちの健康診断』の本郷和人さんという歴史学者の東大教授の方です。やろうと思っていたんじゃないんですけども、突然できるようになって。

—— 力を入れていきたい分野は。

本来の姿は舞台ですね。ただ、自分のやりたいことと皆さんがテレビを通して見たいこととはギャップがあるんですよ。長年やってきてやっと分かってきて、そのギャップを埋めるようにしています。例えば、本場のインドカレーって旅行者には出せないわけですよ。やっぱりある程度辛さをマイルドにして出して、カレー

のよさ、香辛料のよさは味わってもら。舞台は「通」向けなんです。香辛料を辛いまま出すんです。次がラジオですね。ラジオは結構辛くていいんです。テレビはやっぱり結構マイルドにしないとだめです。スポンサーがいて、プロデューサーがいて、ディレクターや出演者を誰にしようとチームを組むわけですよ。

視聴者の方も直接的にお金を払っていませんから、非常にファジーな関係なんです。ところが舞台になりますと、チケットを直接買うわけですよ。それで直接見に来て、それで笑わせてくれと。だからやっぱりマイルドなものじゃだめなんです。

だから本当は自分の好きなことをやって、それがすべてで皆さんに受け入れられるんだったらそれが一番喜ばしいんですけど、現実にはそうはいかないんです。

—— 仕事に関して何か悩まれたことはありますか。

一番悩んだのは、ジャイアント馬場さん、プロレスですよ。モハメド・アリ、西城正三はボクシング。輪島（功一）さんも、具志堅（用高）さんもボクシング、プロレス、野球、千葉真一さん、そんなまねばかりなんです。だから女子に受けないんですよ（笑）。男にしか受けてこなかったんですよ。ラジオでもファンの集いをやると、9割9分が男で、女子がいらないんです。

ところが、『笑っていいとも！』は女性が9割以上なんです。この違和感たるもの、どうしていいか分からなかった。30代から40代にかけて『いいとも！』は苦手でした。馴染むのに8年間かかりました。

『笑っていいとも！』には、32歳ぐらいで入って40歳ぐらいになったときに娘が9歳だったのかな。ぽっと客席を見たときに、「あ、うちの娘の数年後だ」と思ったんですよ。「あ、何だ、別にそんな緊張することもないし、ああ、そういうことを考えているんだ」と思って気が楽になったんです。苦手意識を払拭しました。娘がいてくれたおかげですね。

—— 長年芸能界を見てこられて、お笑いに変化を感じることはありますか。

圧倒的に人数が増えましたね。僕がデビューしたころは東京には同年代がいなかったんです。

当時は、養成学校がなかったですから、まず弟子みたいになっていた。僕がデビューして10年後にNSC

(吉本総合芸能学院) ができるんですよ。NSCができると今度は太田プロとか、マセキ(芸能社) だとか、それから今度はアイドルの事務所だったサンミュージックやホリプロやナベプロまでがお笑いをやるようになって、養成学校をつくるようになって、ものすごい人数がばーっと拡大していききましたよね。

昔は師匠を通さないと芸能界、芸人の世界に入れなかったんですよ。落語家と同じなんですよ。

だけど僕のころから、テレビ番組で勝ち抜いてなっちゃうから、吉本さんも気が付いたんですね。あれ、別に師匠とかの門をたたかなくても一般で公募した方がいい人材が見つかるんじゃないかと。NSCの1期がダウタウンですからね。

コメディアンというのは、昔は、飲む打つ買うで、ちょっと悪な男のイメージがありました。それが今もう小学生の憧れの職業みたいになりました。(明石家) さんまさんを筆頭にして、タモリさん、(ビート) たけしさん、ダウタウン、とんねるず、ウッチャンナンチャン、ナイナイ(ナインティナイン) ってね。

昔はちゃんとした番組の司会ができなかったんですよ。だいたいゴールデンができなかったんですよ。バラエティー番組って、夜9時過ぎてからちょっとお笑いがあったんですよ。夜7時から9時のゴールデンタイムは、歌か映画かドラマなんですよ。それを萩本欽一さんが悔しいと、俺たちは下に見られていると。それで『欽ドン!』を始めて、そうしたら『ドリフ』が始まって、『オレたちひょうきん族』が始まって。そうするとゴールデンタイムが今はもうバラエティーがすごいでしょう。ほとんどバラエティーじゃないですか。

それで司会をさんまさんがやったり、ダウタウンがやったり。それまではアナウンサーとか、俳優さんがやっていたんですよ。それをお笑い界の人がやるようになりましたから、まあ、変わりましたよ。僕のデビュー当時から。市民権を得すぎましたね(笑)。

——バラエティー番組に限らず、教養番組や情報番組でも司会者がお笑いの方であるのが普通な感じがしますが、これからさらにお笑いの方が活躍していく場が増えていくのでしょうか。

これはどんどん増えると思いますよね。また人数が増えましたから、そこから勝ち上がるためにみんな努力をするから、どんどん選手層が厚くなるからね。

——海外のコメディーも見たりされるのでしょうか。

僕は昔、モンティ・パイソンの大ファンでした。モンティ・パイソンとクレージーキャッツに憧れて、平成元年に『カンコンキンシアター』という舞台を立ち上げたんです。自分でやろうということになって、35歳のときに旗揚げしました。それで今年30年目です。

——今やりたいお笑いというのはどのようなものですか。

僕がやりたいのは、やっぱりナンセンスコント。クレージーさんがやっていたような、内容のないようなコントですよ。くだらないコントが好きですね。社会風刺とかはあんまり好きじゃないんですよ。くだらないのが好きなんです。

——弁護士会や弁護士に対するイメージを教えてください。

やっぱりお堅くてまじめというイメージがあるじゃないですか。だから、いろいろなタイプの弁護士がいてよいと思います。

弁護士の方もなかなか人間くさいところがあるんだ、面白いところがあるんだというようなところを、弁護士仮装パーティーとか、ハロウィーンで弁護士会がやって来ましてといって、ハロウィーンのときに弁護士の人がいろいろな格好をしてやるとかね。そういうような活動も時には必要なのかもと思います。

——私たち広報委員会も、弁護士会のチラシを作ったり、ポスターを作ったり、PRするのに何かキャラクターを作った方がいいんじゃないかと議論をしています。

「守る君」ですよ。弁護士ですから守る君。法律を守る、そして皆さんを守る。あと耳が大きくて、「聞き耳君」(笑)。ビッグイヤーの、「BE君」です。フェネックって耳の大きいキツネのような感じでね。やっぱり柔らかい感じも、逸脱しない程度にやるといいですよ。

プロフィール せきね・つとむ

東京都港区出身のお笑いタレント、浅井企画所属。独特のモノマネやコメントで、老若男女問わず根強い人気を博している。お笑いタレントとしてだけでなく、俳優、歌手、司会者、バラエティ番組を中心に、テレビ・ラジオ、CM、舞台とマルチに活躍している。